

斎藤洋一著『五郎兵衛新田と被差別部落』

須田 肇

本書は、「五郎兵衛新田村とはどのような村だったか、この村で被差別部落の人々はどうのような生活を送ってきたか」(四頁・二九五頁)という二つの問題関心から書かれた。それ故に、構成も大きく二部に分かれる。まず、第一部 江戸時代の五郎兵衛新田村——「村明細帳」を中心に——が前者の関心に答えようとした部分であり、それに続く、第二部 五郎兵衛新田村の被差別部落——「穢多人別帳」を中心に——が後者の問題関心に対応する部分である。

内容的な検討に入る前に、まず本書の舞台となる五郎兵衛新田村(現在は浅科村)で、二つの社会運動が起きたことを確認しておきたい。一つは御馬寄区で起きた「はり紙」差別事件に対する一連の「実力闘争」¹⁾部落解放運動であり、いま一つは、「学習院大学に対する古文書返還闘争」である。二つは決して無関係に起きたものではなく、発展的経過をもつ運動である(一五頁・二〇頁・一五一頁・一五六頁)。本書はこの社会運動を主題とするのではなく、江戸時代の五郎兵衛新田村の概況と江戸時代の被差別関係史料から判明

したことを主題とするものであるから、運動の経過及びその後の史料保存、活用などについて残念ながら、詳しく知ることはできない。文書館法の成立、各地での文書館・博物館の設立、史料保存運動などの現況を考えるうえで、当該の運動が客観的事実として報告される機会が早急にあることを希望するものである。『水と村の証言——五郎兵衛新田物語——』や『水と村の歴史』に報告されているが、史料返還後の状況はふくまれていない。

これらの運動の評価については、様々な立場からなされると考えるが、一つの帰結として本書が生み出されることとなったのであろう。本書はまた、歴史上の一書として、被差別部落史研究と近世農村史研究とが「別個に進められてきた傾向」(二二頁)を埋めるという目的ももつ。しかし、前述のように、二つの課題、二部の構成という形式では充分にこの目的を達することはできにくいであろう。被差別のみが一方的に強調されるのではなく、差別・被差別の関係を内在させている農村社会の解明、総体的理解が求められるのであ

ろう。

次に、内容的な側面を検討する。第一部は文章も平易であり、大変わかりやすい。具体的な実例を解説しながらであるので、近世農村史、「地方文書」の入門者にとって有益な書となるであろう。史料として「村明細帳」の全文が『水と村の歴史』二・三号に紹介されていることも、今後、利用する際には有難いものである。より有効なものとするためには、口絵などで「村明細帳」の実物写真が提供されていればよかったと考える。

第二部については、いくつかの疑問点が出てくる。第一点は、被差別部落のおこりについてである。「江戸中期の宝永四年二月に、高野町の太兵衛が五郎兵衛新田村の治安を守る役割を担って移住することになった。その太兵衛は、代々高野町の牢守を務めてきた被差別民与左衛門家の子であった。したがって太兵衛も被差別民であったということになる。そして、ここから五郎兵衛新田村の被差別部落の歴史が始まるのである。とすれば、五郎兵衛新田村の被差別部落は、五郎兵衛新田村の治安を守るために成立したのであって、村人から感謝されることはあっても、差別され、迫害されなければならぬ理由などまったくなかったといつてよいだろう。」「五郎兵衛新田村の被差別部落は、五郎兵衛新田村の依頼によってつくられたもの」(一六三頁～一六九頁)と斎藤氏は述べている。また、「この時期、この地方の村々に治安問題が生じていて、それへの対策として各村で部落の誘置がはかられた」(一六五頁)ことにも言及している。

それは史料に基づいた着実な叙述であるから、いちいち納得する

が、(一)具体的に、治安問題とはどんなことなのであるのか。(二)太兵衛だけで一村全体の治安を守ることができうるのか。(三)村民からの差別・迫害が起きているのか。また、差別の契機は何であったのか。(四)五郎兵衛新田村やこの地方の各村の要請に応じる被差別民側の事情は考慮しないのでよいのだろうか。という疑問点が生ずる。特に、四について今後の研究が進展することが望まれると思う。

第二点として気になるのは、被差別部落そのものの歴史の変質を考える必要はないのであろうか、という点である。宝永期——高野町から五郎兵衛新田村の治安を守るために太兵衛が移住してきた時期——と、嘉永・安政期——「穢多頭」が創出されて支配領域を超えた被差別部落の連携がなされたと考えられる時期——とでは、被差別部落内部に変化が起きているとは考えられないだろうか。

特に、「作太郎」一件のような事件が起きてくることや、「穢多与右衛門」を取調べる立場に立つたり(二五二頁)、無宿人を召捕える実行力を持ったり(二五六頁)、御影代官所管内の被差別民を差図する「権太郎」の存在(二五八頁)が生み出されてくることは、被差別部落内での変質があったと考えられるのではないだろうか。つまり、「穢多」身分内で階層ができてきている状況が考えられ、それを「一般村民と被差別民」という構図から「被差別民内部の対抗関係」という構図への変質と理解できないであろうか。「天保期」ごろから、部落を逃げだして一般身分にまぎれこむ部落の人びとが増加しており、(中略)これに対して幕府や藩は『えた狩り』をして対抗していたのである。(二四二頁)という歴史的背景をも考えあわせれば、「えた狩り」の「御用」を勤める「穢多」の存在と追われる「穢多」

の出現という構図は首肯されるだろう。この対抗関係は、一般村民から受ける差別より、一層、悲しむべきものであるといわざるをえない。そのことを冷静に考えてみれば、「取調べるがわに立たされた権太郎の胸中が察せられよう。」(二五三頁)といった叙述は、やや感傷的なもののように思われ、被差別部落の歴史的変質が考慮されるべきであろう。

第三点は疑問というよりは希望であるが、被差別部落の墓石調査についてである(一九四頁～一九五頁)。墓石の刻銘文のみではなく、基礎的な調査資料として、墓石の形態、大きさ、石質、墓石の配列、墓地の立地などの項目をも知りたいと思う。

もちろん、墓石に刻まれた年号などを手がかりに、被葬者を「穢多人別帳」に記載されている人物と比定していくことは、モノ資料と文献史料とを結びつける有意義な方法であり、具体的な作業として大変興味深いものである。しかし、それが差別の実態にアプローチしていく有効性をもつとは考えられない。差別の実態に近づくにはまず、五郎兵衛新田村の墓石悉皆調査とでもいうべき調査のなかに被差別部落の墓石調査も位置づけていくことが必要であると考ええる。そのためにも調査項目は多岐にわたることが望まれる。悉皆調査を通じて、五郎兵衛新田村の墓石全体(被差別部落をもふくんだ全体)を見通すことができ、そこから、農村のなかの被差別部落の実態の一面を明らかにすることができるのであろう。

いま、三万点を超える五郎兵衛古文書に対しては、斎藤氏により「被差別部落史研究」という切り口を示された。また、以前から、大石慎三郎氏、伊藤一明氏により「近世農村史研究」特に新田開発史

研究という切り口をも持っている。今後、この古文書群を用いて、様々な研究方向が生まれてくるものと思う。今後の研究成果が豊かになることを期待しつつ、書評を終えたい。

(一九八七年十一月 三一書房刊 定価二〇〇〇円)

(追記) 本書の刊行から日を隔てての書評であることを著者斎藤氏にお詫びするとともに読者の寛恕を乞うものである。